

前近代社会における都市の経済的機能

関根 順一

1. 本稿の課題

前近代社会¹⁾における生産技術は不確実性の高い農業生産と熟練労働に依存する工業生産によって特徴づけられた。領主制は、この2つの特徴を備えた生産技術に対応する生産組織である。すなわち、農工間の分業に立脚し、農民が収穫した農作物と手工業者が製造した工業製品の交換を領主が仲介する領主制によって、この特定の生産技術に基づく生産活動は維持される²⁾。

さて、ある生産組織のもとで特定の生産活動が続けられるということは、その生産活動に必要な財、すなわち生産活動に直接必要な原材料および生産活動に携わる人々の生活物資のすべてをその生産組織内部で調達できるということである。領主制も特定の生産技術に基づく生産活動の継続を保証している以上、その生産活動に必要な原材料と生活必需品のすべてを領主制内部で調達しなければならない。言い換えれば、生産活動の継続に必要な財を自給できてはじめて、領主制は農工間の分業に基づく生産活動を維持できる。実際には、領主は農民や手工業者の平均所得を上回る所得を手にし、その消費項目は奢侈品を含む。しかし、奢侈品は、生産活動に直接必要な原材料でもなく、生産活動に携わる人々の生活必需品でもないから、奢侈品の自給は農工分業体制の下での生産活動の継続にとって第一義的重要性を持たない。

従来、われわれは暗黙のうちに領主が成立する地理的範囲を農村に限定し

てきた。しかしながら、領主制の成立範囲を農村に限定してしまうと、実際の領主制は、理論上備えているはずの自給自足性を満たさない場合が多いことに気づく。農村が近隣都市と交易関係を保ち、農工間の分業に基づく生産活動に不可欠な財の供給を都市にも依存しているとき、農村の自給自足性は大きく損なわれる。このとき、農村を舞台に展開する領主制は農工分業体制に基づく生産活動を独力では維持できず、領主制を農工分業体制を支える生産組織とみなし、領主を農産物と工業製品の交換の仲介者と考える領主制の理論はここでは妥当しないように見える。

本稿の課題は、農村と都市の間に交易関係が存在する場合でも領主制の理論が成立するかどうか検討することである。本稿は、研究対象を農村に限定してきた従来までの視野を大きく広げ、前近代社会における都市を取り上げ、個別具体的な経済史研究に依拠しつつ都市の経済的機能を明確にする。その上で、農工分業体制における都市の位置づけを考える。

2. 歴史的事例

前近代社会の諸都市は、比較的狭い地理的範囲での人口の集中を共通の特徴としながら、それぞれ独自の役割を果たしてきた。都市は、ある場合は政治権力の中心であり、城塞や軍事拠点であり、教会や寺院の所在地であり、さらには商工業の中心や交通の要衝であった。また、これらの役割を重複して負うことも少なくない。本稿では、このような政治的軍事的宗教的あるいは経済的独自性を持つすべての前近代社会の都市についてその経済的機能を明らかにする。

各国の経済史研究は前近代社会の諸都市に関する豊富な個別具体的事例を提供してくれる。もちろん、多くの経済史家の関心は都市の発展と衰退、遠隔地交易の展開と流通品目の変化、商工業活動を支える経済組織や制度の変遷などに向けられ、都市経済史の諸文献は都市の経済活動の年代記的記述に満ちているが、同時に、成長と衰退あるいは変動の背景をなす社会構造への言及も忘れてはいない。都市の理論研究に役立てられるのは、個別具体的な経済史研究に散見される都市の経済構造に関する論述である。個別具体的な事

例は一見、際限なく多様であるように思われる。ところが、実際には以下で見るような遠く隔てられた事例の間にも若干の共通点が見出され、都市経済の共通な諸性質に関する研究、すなわち前近代社会における都市の理論研究が成り立つ。われわれが取り上げるのは、中世ヨーロッパ、ラテンアメリカ、インドの各地域における前近代社会の諸都市である。これら3つの地域に関しては、すでに個別具体的な経済史研究の豊かな成果が積み重ねられており、この節では各地域の研究成果を概観する。

(1) 中世ヨーロッパ

中世ヨーロッパにおいて都市とは何よりもまず城壁によって囲まれた区域だった。城壁は都市を目に見える形で周囲の農村から区別し³⁾、城壁の内部では多くの点で農村とは異なる生活が営まれた。そこでは、近隣農村と比べて人口密度が高く⁴⁾、商業活動や工業生産が発達し⁵⁾、国王や領邦君主から周辺領域にない法的特権が認められた⁶⁾。とはいえ、たとえ多数の都市が実際これらの特徴を備えていたとしても、これらを都市の成立要件と考えることはできない。というのは、なかには城壁を持たない都市もある⁷⁾ように、どの都市もこれらの特徴をすべて満たしていたわけではなかったし、これらの特徴が認められる地理的範囲も必ずしも相互に一致しなかったからである。実際、商工業活動の発展に伴って市場は城壁の外でも開かれ、都市の生活空間はそれを契機に旧来の城壁を超えて広がっていったし⁸⁾、都市の法的特権が及ぶ範囲も必ずしも城壁の内側にとどまらなかった⁹⁾。

都市では、紡績・仕立て・皮革製造・金属加工を中心に、武器製造・造船・陶器生産などの製造業、食肉・小麦粉・パン・ワインなどの食料品や毛織物・皮革製品・雑貨を取り扱う商業、建設業や運輸業が発達した¹⁰⁾。14世紀のヨークでは、人数の多い順に織布工・仕立屋・皮なめし工・靴屋・大工をはじめ約100種類もの製造業と卸売・仲買・小売に分かれた商業が成立していたし¹¹⁾、13世紀のパリでも、ほぼ同数の手工業生産の業種が確認されている¹²⁾。実際、大多数の都市住民は、製造業、食品加工および商業活動によって生計を立ててきたのであり¹³⁾、手工業と商業は都市生活の物質的基盤だった。もともと、商工業に従事する人々の割合が高いという事実は、都市での農業

生産を否定するものではない。城壁内には、耕地や採草地・菜園・果樹園が数多く残され、都市の中心部でさえ牛馬の姿を見かけることは珍しくなかった¹⁴⁾し、専門の生業を持つ手工業者も都市に暮らす農民とともに都市内外に農地を保有し、家畜を飼育していたのである¹⁵⁾。さらに、農工間の分業が不完全だったように、工業生産と商業活動の分離も十分ではなかった。零細な手工業者にとって仕事場は同時に店舗であり、出来上がった製品はその場で公衆に販売された¹⁶⁾。その一方で、質の高い毛織物の生産は、フランドルなどの一部の地域で、遠隔地交易に専念する商人の手に握られた。織布工は商人から原料を受け取り、それを加工した上で完成品を再び商人に引き渡した¹⁷⁾。また、一部の成功した手工業者は、事業を拡張し、他人が生産した財を取り扱う商人へと成長した¹⁸⁾。このように、実際には、農業生産は払拭されなかったし、商工間の分業も未成熟だったが、都市への商工業活動の集中は都市に商工業活動の維持に不可欠な社会組織と制度を付与することになった。

農村と同様、都市においても製造業と建設業を特徴づけたのは、規模の小さい生産設備と手工業者の高度な技能である¹⁹⁾。13世紀末および14世紀初めにイングランド南東部の都市コルチェスターで行われた課税評価によれば、一般に、生産設備や生産用具は手工業者の手持ち資産の中でごく小さな割合を占めているにすぎず、手持ち資産に占める割合は、むしろ原材料や仕掛品、製品在庫の方が高かった²⁰⁾。簡単な道具と作業者の技能に多くを依存する生産であれば、規模の大きい経営組織は必要ない。手工業生産が基本的に家族経営によって進められるのはこのためである。原材料と道具を保有する親方と呼ばれる手工業者は、彼の家族や住み込みで働く若干名の徒弟、修業期間を終えたばかりの職人を指揮して、自宅に隣接した仕事場で生産に励んだ。もちろん、こうして仕上がった製品は親方のものである²¹⁾。一方、徒弟は3年から10数年の間、賄い付きで親方に就いて修業を積み、それぞれ専門の技能を身につけた²²⁾。技術教育がこのような比較的長い時間をかけて施されることは、専門の技能がまさしく熟練によって養われることを明瞭に示すものである。

簡単な道具と手工業者の技能を技術的な基礎としているために都市の手工業は原則として相互に独立性の高い多数の小経営の並立という形をとった。

ただし、この言明には若干の限定が必要である。第1に、城壁内の手工業生産はすべて独立性の高い小規模な経営組織によって営まれたのではない。すでに見たように羊毛などの原材料供給や毛織物製品などの完成品の販路を遠隔地商人が掌握している場合、織布工は遠隔地商人の事実上の下請けになり、経営は独立性を失う。遠隔地商人による問屋制手工業のもとで、このような境遇の手工業者は小経営の主というよりはむしろ近代的な意味での労働者に近づく²³⁾。また、一部の工業生産に関しては、水車やパン焼きかまど、ぶどうの搾り器、染色工房、なめし皮工場などの大型生産施設が利用されるが、このような生産設備の建設、維持および管理は主に領主の手で進められた²⁴⁾。第2に、独立性の高い小経営ではあったが、それぞれの親方の仕事場は、夜業の禁止、徒弟の人数制限、原材料から完成品に至る品質管理や価格設定など外からの規制を受けた²⁵⁾。多くの都市では各業種ごとにあるいは各生産工程ごとに、親方を正規の構成員とする同業組合 (guild) が作られ²⁶⁾、組合の内規を定め、生産活動の定期的な検査を行い、同業組合自身の判断に基づいて規律違反を取り締まった²⁷⁾。製品の品質管理と組織内での過当競争の防止がその主な目的である²⁸⁾。

さて、都市は城壁の内側にいくらかの農地を抱えていたが、商工業者・聖職者・軍人からなる都市の消費²⁹⁾をそれだけで支えることはできなかった。そこで、都市住民は不足する食糧や工業原料の調達を城壁の外に、すなわち近隣農村と遠隔地交易に頼ることになる。とりわけ、食料調達に関しては、都市周辺の農業への依存は著しい³⁰⁾。実際、13世紀のイングランドで見られたように、都市の成長に伴う国内市場の拡大と穀物価格上昇に合わせて領主直営地の生産は強化され³¹⁾、また、近隣農村の農民は貢納の一部を貨幣で支払う必要に迫られて穀物や羊毛・皮革・麻を市場で換金した³²⁾。都市の内外では、特に城門の近くで市が立ち³³⁾、農村から持ち込まれた農産物と都市の手工業製品が取引された³⁴⁾。もちろん、ベルギーを流れるムーズ川流域で確認されたように、市場は純然たる農村地域でも開かれ、農民はそこで都市商人と出会うことができた³⁵⁾。こうして、都市とそれを取り囲む農村地域の間には、農村が生み出す食糧と工業原料が都市の手工業製品と交換される地域内交易が成立するようになる。

もつとも、地域内交易は決して自由な市場取引ではなかった。それはまず領主層の介入から自由ではなかった。一般に、市場の管理者は、司教であれ、貴族であれ、修道院であれ、都市当局であれ、国王や領邦君主から市場開設の認可を得る必要があり、イングランドでは、新市場が既存の近隣市場と競合しないか州知事による調査を待って新市場の開設が認められた。さらに、市場での商取引は日時と場所の指定を受け、すべての商取引は闇取引を防ぐため、日中、公然と行われなければならなかった。買い占めや投機のような独占的行為も罰金の対象である³⁶⁾。都市の発展とともに地域内交易に対する規制の実務は領主の手を離れ、商人ギルドへさらに都市当局へと移されたが、規制の内容自体は大きく変わることはなかった。どちらの団体にも商取引に関する規則を定め、執行し、違反を取り締まる権限が与えられた³⁷⁾。特に、都市当局は、都市に流入する穀物をはじめとする食料品の取引に目を光らせていたが³⁸⁾、これは都市住民にとって円滑な食糧供給が保証されるかどうかは当時まさしく死活的な問題だったからだろう。一方、地域内交易に比べれば、遠隔地交易への規制は、はるかに緩やかだった。というのは、地域交易圏の外からの食糧輸入に対しては地域内交易の規制は適用されなかったからである³⁹⁾。最後に、市場の管理者は、そこでの商取引に流通税を課し、その課税収益は地代・関税・罰金も含めてかなりの額に達した⁴⁰⁾。

多くの都市では商工業活動に適した法体系が整備され、都市住民は農村地域と異なる法的特権を手にした。商業活動や工業生産の発展のためには、領主による商工業活動への恣意的な介入が制限されなければならなかったからである⁴¹⁾。都市住民はまず、農村には認められなかった人身の自由と財産権を得た。農村地域を特徴づけた人身の束縛は都市生活と両立しがたかった⁴²⁾。次に、都市住民が獲得したものは自治権である。イングランドでは、13世紀までにすでに大部分の主要都市が自治権を獲得し、14世紀初頭には40もの都市が財政担当者を自分たちの間で選出する権限を手にした⁴³⁾。最後に、都市当局は下級裁判権を、また、すでに述べたように各同業組合もそれぞれの業種の中で一種の司法権を行使した⁴⁴⁾。もちろん、獲得の時期や程度が国によってあるいは地方によってかなり異なっていた⁴⁵⁾ように、すべての都市が等しくこれらの自由や特権を享受できたわけではない。その意味で、ここ

で示したのは、中世ヨーロッパにおいて都市住民が手にすることのできた自由と特権の最大限である。

とはいえ、たとえ最大限の自由と特権を達成できたとしても、それによって都市住民は領主の存在を城門の外に追い払い、領主の抑圧から完全に解放されたわけではなかった。いくつかの新興都市の誕生に際しては国王や領邦君主の軍事的意図や政策的配慮あるいは在地領主の経営方針が大きく関わっていたことはいうまでもない⁴⁶⁾が、古くからある都市についても世俗領主が城壁内に居城を構え、教会領主が市内各所に司教座聖堂や教会堂、修道院を設けるなど領主層の姿が城壁内から消えることはなかった⁴⁷⁾。さらに、生活の拠点を都市に置いているかどうかとは無関係に、国王や在地領主、教会領主は城壁内に農地・邸宅・店舗などの財産を保有し、市内に飛び地として残る領地で農民から地代や税を徴収すると同時に市場では流通税を課し、裁判権を行使して人々から罰金を取り立てることができた⁴⁸⁾。同業組合や都市当局の自由や特権も、領主層が設定した枠を決して踏み越えるものではなかった。確かに領主層が商工業活動に関する権限を都市当局や同業組合に委譲したのは事実であるが、領主層はその範囲を超える上級裁判権については、これを決して手放そうとはしなかったからである⁴⁹⁾。そのうえ、下級裁判権の委譲についても一定の税負担や賦課と引き換えであった⁵⁰⁾。特に、イングランドでは、都市当局は王権に対して徴税義務を負い、その義務を果たせない場合には自治権を取り消され、国王の直接管理下に置かれることもあった⁵¹⁾。結局、都市当局は一面において、以前は国王や在地領主の役人が遂行していた徴税実務や監督業務⁵²⁾を代行していたのである。

都市は決して同質的な空間ではない。聖俗の領主層の存在を無視できない点はともかく、都市を中心に商工業を営む人々の間でさえ政治的経済的格差は小さくない。都市手工業者や小売商人など都市住民の大多数は自宅兼仕事場として利用する家屋以外に満足な資産を持たず、親方の下で働く職人や自由労働者や貧民など十分な所得を受け取ることをできない者も非常に多い⁵³⁾。その一方で、様々な商品を取り扱う少数の富裕な商人は壮麗な邸宅に住み、城壁の内側だけでなく農村にも地所を保有し、不動産投資からもかなりの収益を上げることができた⁵⁴⁾。都市当局の要職を代々独占し、都市の政治権力

を長く掌中に収めてきたのも、このような一握りの大商人の家系である⁵⁵⁾。都市貴族と呼ばれる彼ら政治支配層は都市財政等をめぐって一般市民との対立を深める⁵⁶⁾一方、生活様式は一般の都市住民よりもむしろ領主層に近く、一部には姻戚関係や政治的地位を利用して領主層への同化も進んだ⁵⁷⁾。政治的にばかりか社会的にも、都市貴族は、ちょうど在地における所領役人と同じく、国王を頂点とし、貴族、騎士へと広がる領主階層の最底辺にきわめて近い存在であるとみなされる。

都市の階層格差は食糧危機に際して一層顕著になった。よく知られているように、中世ヨーロッパでは農業生産の不振はしばしば食糧危機を引き起こし、人々を苦しめた。都市もまた例外ではない。フランドル地方では1315年の凶作により翌年、深刻な飢饉が発生し、その後の伝染病の流行と合わせて多くの犠牲者を生んだ。なかでも被害が大きかったのは、穀物価格の高騰により食糧を手に入れることができなくなった貧困層である。一方、領主層にはこの飢饉は何の被害も与えなかった。むしろ、平年時より穀物を備蓄していた領主は、この機会に、貯蔵していた食糧を高価で売り払い、莫大な利益を上げることができた。最後に、都市当局は穀物を複数の領主から買い上げ、市場価格よりずっと低い価格で一般市民に提供した⁵⁸⁾。

(2) ラテンアメリカ

発展途上国の社会は、純然たる前近代社会ではなく、すでに確立したかあるいは確立しつつある外部の近代社会からの強い影響下に置かれた前近代社会である。発展途上国の事例を前近代社会の研究に活用する際、特に注意しなければならないのはこの点である。中世ヨーロッパの事例を取り上げる限りでは外部からの近代化の圧力を心配する必要はまったくなかった。中世ヨーロッパは最初の産業革命のはるか以前の社会であり、その外部に近代社会は存在しなかった。だが、ラテンアメリカやインドなどの発展途上国の場合、近代化を達成したか近代化への途を歩むヨーロッパ列強からの影響を無視することはできない。発展途上国の前近代社会にはヨーロッパ列強との政治的経済的接触によって異質な要素が持ち込まれ、発展途上国の社会は徐々にその本来の姿を失っていった。より正確に言えば、発展途上国の社会は、

多分に前近代的要素を残しながらも、前近代的要素と近代的要素の混交である。それゆえ、発展途上国における経済史研究の成果を前近代社会の解明に役立てようとするれば、その成果のすべてを無批判に受容するわけにはいかない。明らかになった事実1つ1つについて、それが前近代社会の構成要素であるのかどうかを吟味する必要に迫られる。このような吟味を不可欠とする点こそ、発展途上国の事例を取り上げるにあたっての最大の困難である⁵⁹⁾。

発展途上国の経済史研究が持つこのような困難は、都市の諸問題を考えるとき一層深刻なものとなる。というのは、都市は発展途上国の国土の中で海外からの政治的経済的圧力を最も強く受けて来た部分であり、特に、各国の首都を始めとする若干の大都市は、発展途上国における先進国の「飛び地」と言えるほど周辺領域と比べてかけ離れて近代化が進んだ区域だったからである。

ラテンアメリカの諸都市についても先進工業国からの多大な影響を指摘することは難しいことではない。先住民の都市を転用した2、3の例を除けば、そもそもラテンアメリカの主要都市の多くは、貴重な労働力と貢納品を供給するインディオ先住民に対する支配の拠点としてスペイン人征服者の手で新しく建設された新興都市である⁶⁰⁾。さらに、これらの諸都市は、18世紀には主要航路上に位置する貿易港を中心に農畜産物の輸出によって栄え⁶¹⁾、独立以後もヨーロッパや北アメリカでの産業革命の進展に伴う農産物や鉱物資源の輸出拡大を通じて人口の増大など一層の発展を遂げた⁶²⁾。ラテンアメリカの各都市は、公共施設・学校・病院の建設や街路の整備など都市環境の改善に力を入れ⁶³⁾、なかでも各国の首都は、ヨーロッパの大都市並みの近代的で開放的な都市環境の創出に努めた⁶⁴⁾。もっとも、このような華々しい発展は各国の首都を始めとする大都市に過度に集中していたことは忘れてはならない⁶⁵⁾。

前近代社会において都市がどのような経済的役割を果たしているのかを明らかにしようとするとき、独立以後、急速に近代的性格を強めていたラテンアメリカの大都市を参考事例とすることに難があることは明白だろう。そこで、近代的要素が入り込む余地をできるだけ小さくするために、この都市の諸問題に限って研究範囲を植民地期に限定する。とは言っても、当然のこと

ながら、植民地期への限定によっても発展途上国の都市研究が抱える困難を完全に回避できるわけではない。

当初、軍事行政上の拠点としてあるいは鉱山開発の基地として建設されたラテンアメリカの諸都市は人口の増大とともに種々の経済的文化的機能を備えるようになる。経済的には都市は商業・娯楽・文化・教育・医療など各種サービスが提供される場であり⁶⁶⁾、なによりも各種工業製品が生産される場である。都市では、毛織物・絹織物・綿織物などの生産⁶⁷⁾から服飾品や皮革製品の製造⁶⁸⁾、パン・ブドウ酒・蒸留酒を生み出す食品加工⁶⁹⁾、貴金属製品や鉄製品の製造⁷⁰⁾、家具や陶器など調度品の制作⁷¹⁾、建築⁷²⁾にいたる幅広い分野の手工業が成立した。これらの工業生産を直接、担ったのは都市の手工業者である。たとえば、現在のチリの首都サンチャゴでは17世紀後半、上述の各産業分野ごとに親方・職人・徒弟からなる数名から30名程度の専門の手工業者を見出すことができる⁷³⁾。当時の技術水準では、水車、パン焼きかまど、製糖工場などを除けば、一般に大規模な生産設備は必要なかったから、親方は、2、3名の職人と徒弟を従えながら、たとえば鉄鍛冶であれば高炉・ふいご・万力・やっところなどの簡単な工具を扱い、それぞれの生業に打ち込み、出来上がった製品を販売していた⁷⁴⁾。一方、徒弟は、織物生産を例にとれば、3年の間、織物工場で働きながら織布など必要な技能を身につけることになる⁷⁵⁾。植民地期の都市手工業で大きな役割を果たしたのは、大規模な工業設備ではなく、熟練によって培われた手工業者の技能である⁷⁶⁾。もちろん商人や大土地所有者が経営するオブラヘ(obraje)と呼ばれる織物工場に織工が集められることはあっても⁷⁷⁾、比較的簡単な生産用具と手工業者の技能に基づく都市手工業の基本的特徴は変わらなかった。

こうして、多くの都市では植民地期を通じて商工業やその他のサービス業が発展した。しかしながら、その発展は常に順調というわけではなかった。手工業者・役人・軍人・聖職者など商工業活動や各種サービス業に従事する人々は自ら農業生産に勤しむことなく食糧を消費していたから、都市における商工業やサービス業の拡大は、食糧生産の縮小と同時に食糧消費の増加によって都市住民に深刻な食糧問題を突きつけることになる。都市における食糧需要はその自給量を大幅に超過していたからである。もちろん、市街地に

も耕地やブドウ畑が残り⁷⁸⁾、市内で牛などの家畜も飼育されたが⁷⁹⁾、そこでの生産は都市住民の食糧需要にはるかに及ばなかった。都市住民は、必然的に必要な食糧の相当部分を都市外部の農業生産に依存する。都市住民の食糧を外部からいかに安定的に確保するか、このことが都市の存続と成長を左右する最重要課題になった。

都市が必要とする食糧や工業原料は主として周辺の農村地帯から持ち込まれる。たとえば、メキシコ西部の都市グアダハラでは、その周辺を取り巻く半径50kmから100kmに及ぶ卵形の農業地帯から都市住民の生活に欠かせない穀物をはじめ数々の日用品の供給を受けていた⁸⁰⁾。都市に農産物を供給していたのはまず第1に、貧しい独立自営農民やインディオ、小牧場主である。彼らは、都市近郊に住み、まれに都市の市場を訪れ、自分の保有地で生産したトウモロコシ・豚・山羊・鶏・野菜・乳製品を販売した。1人1人の農民は、自ら育成し、栽培した生産物のごく一部を市場に供給していたにすぎないが、彼らが全体として都市の食糧供給に果たした役割は決して無視できるものではない⁸¹⁾。次に、独立自営農民と並んで重要な役割を演じていたのは、都市周辺で大規模な農園や牧場を営むアシエンダ所有者や牧畜業者である。彼ら大土地所有者は比較的少数ながらも、自分の手であるいは彼らの家族の一員である商人の手を介して大量の穀物や食肉を都市に運び込んだ。グアダラハラの場合、食肉の供給は通常若干の牧畜業者が独占しており、また、主要なアシエンダ所有者が供給する小麦は市中の全消費量の20%から25%に達した⁸²⁾。こうして市内に持ち込まれた農産物の一部は、以下に述べる公設倉庫に納められたが、残りは市場であるいは大土地所有者の直営店で販売された。たとえば、メキシコ市近郊の糖業アシエンダは市内に砂糖販売店を設け⁸³⁾、また、サンチャゴ周辺の主だったアシエンダ所有者は、自分の農園で栽培した作物・ワイン・パンを市内の邸宅で販売した⁸⁴⁾。もちろん、都市の経済活動が周囲の農村に依存していたのは食糧生産だけではない。都市近郊の農村は綿花・羊毛・獣脂・獣皮などの工業原料の供給源でもあった⁸⁵⁾。

農産物や工業原料の対価として差し出されたのは手工業製品である。たとえば、メキシコ中部の都市ケレタロの織物工場で生産された毛織物は、工場内の売店で市内の市場であるいは商人によって販売された。また、毛織物の

相当部分は直接、都市近郊の農園や牧場に持ち込まれ、アシエンダ内の販売店を通じて農民に手渡された⁸⁶⁾。手工業生産の比重が高い都市と農業を主な産業基盤とする周辺農村の間に工業製品と農産物の交換が成立する。

旺盛な都市の食糧消費を支えたのは都市近郊の農村地帯だった。もっとも、当時の粗放的な農業技術のもとでは都市への食糧供給は確実ではなかった。都市への食肉供給は安定しなかったし、市内に運び込まれる穀物は年ごとの変動や季節変動を免れることはできなかった⁸⁷⁾。それでも、食糧供給の不確実性をいくぶん緩和するのに役立っていたのは、独立自営農民やインディオばかりか大土地所有者も参加していた穀物市場である。税負担や地代の支払いなど差し迫った現金需要に直面する一方、十分な信用手段を持たない小規模農民経営は、収穫後ただちにトウモロコシ等農作物を市場で売却した。その結果、収穫後の数カ月間、農作物は市場にあふれ、相場の低迷が続いた。やがて、農民が余剰作物を売り払ってしまうと、市場に流入する穀物の量は次第に減少し、価格が上昇し始める。農作物の貯蔵設備を持ち、十分な資金と信用手段を備えたアシエンダ所有者がそれまで備蓄していた穀物を市場に放出するのはこのときである。こうして、高い利得を求めるアシエンダ所有者の行動は、年間を通じての市場取引量の激しい変動をわずかでも和らげる効果を持った⁸⁸⁾。

しかしながら、市場の力に限界があることは明らかだった。人々の自由な商取引に任せるだけでは都市住民への安定的な食糧供給は実現できない。そのことを熟知していた公権力、今の場合、都市当局は進んで農産物市場への介入に乗り出した⁸⁹⁾。第1に、都市当局は食肉の専売制度を設けた。たとえば、グアダラハラでは、都市当局が数年にわたって牛肉や小羊の肉を市内に独占的に供給する権利を競争入札によって数名の牧畜業者に与えた。この制度は少なくとも表向き都市住民に食肉を妥当な価格で安定的に提供することをめざしており、契約通り食肉を納入できない業者にはそのたび重ねる契約不履行に対して罰金が課せられた⁹⁰⁾。また、サンチャゴでは、同様の制度が食肉だけでなく魚肉についても設けられた⁹¹⁾。第2に、都市当局は小麦やトウモロコシの公営倉庫を開設した。グアダラハラでは、パンの価格は小麦価格に固定比率で連動するよう定められ、また、小麦や小麦粉の転売や闇取引は

違法とされた⁹²⁾。グアダラハラは都市当局は、価格統制の強化と不正行為の防止を目的に市内外のすべての穀物取引が公営倉庫で行われるよう取り決めた⁹³⁾。さらに、トウモロコシについては、市場取引が不活発な時期、あらかじめ買い上げておいた備蓄分を都市住民に売り払い、季節変動の緩和に努めた⁹⁴⁾。公営倉庫もまた、ラテンアメリカ各地の諸都市で発展した社会制度である⁹⁵⁾。

専売制度を維持し、公営倉庫を運営してきた都市当局は、その公共性の高さにもかかわらず、アシエンダ所有者や牧畜業者など大土地所有者との結びつきが深い。たとえば、食肉の専売制度を見れば、この制度の実務を担当していた委員会には主だったアシエンダ所有者が市の行政担当者の資格であるいは土地所有者の代表として出席し、自分たちの都合のよいように食肉の買い上げ価格を決めていた⁹⁶⁾。もちろん、このような都市当局と大土地所有者との癒着は食肉の専売制度にとどまらない。アシエンダ所有者は、牧畜業・商業・鉱山経営にも手を広げる一方、市議会議員・書記官・財務官など都市の立法行政機関の要職を手中に収めた。しかも、高額で購入したこれらの官職は地所や水車・家畜・奴隷とともに世襲財産の一部をなし、親から子へ代々受け継がれた⁹⁷⁾。都市の政府機関の要職は個々の大土地所有者の手に握られていたのではなく、彼らの家系に掌握されていたのである。その意味で、大土地所有者と公権力の結びつきは、きわめて強固であった。

前近代社会では、農業生産の脆弱性によって農作物の不作は避けられず、都市もまた周辺農村での不作によって甚大な被害を受けた。都市当局の努力にもかかわらず、都市への食糧供給は滞り、市内各所で飢饉や疫病が発生した⁹⁸⁾。このような深刻な食糧危機に直面して、都市当局はその被害を最小限にとどめようと種々の対策を講じる。市内に小麦やトウモロコシを私的に保有している者にはその販売を強制し、近隣農村には調査官を派遣して隠匿物資を摘発し、さらに、周辺農村全域からの穀物の域外流出を禁止した⁹⁹⁾。

(3) インド

インドは、16世紀以降ヨーロッパ列強の進出を受け、特に18世紀半ばから1947年の分離独立まで約200年間、イギリスの植民地統治下に置かれた。イン

ドの前近代社会は、この植民地支配を通じて、産業革命を経て勃興するイギリス近代社会との接触を持つ。イギリスによる植民地統治は、インドの社会と経済にどれほどの影響を与えたのだろうか。この点については大いに議論の分かれる所であるが、少なくとも都市に関しては植民地支配の影響を無視することはできない。アラハーバードまでの東インド鉄道建設は、鉄道沿線に新しい商業拠点を誕生させると同時に、ガンジス川やジャムナ川の沿岸で繁栄を続けてきた古い商業都市の没落を招いた¹⁰⁰⁾。また、ベンガル条例やイギリス人行政長官の発する法令は、植民地以前の都市統治機構の枢要であった都市役人の手から司法権力を徐々に奪い取った¹⁰¹⁾。

植民地統治下のインドの都市では、他の発展途上国の都市と同様、前近代的要素と近代的要素の併存が見られる。それゆえ、植民地期インドの事例を前近代社会の都市研究に活用しようとするれば、何よりもまず前近代的要素と近代的要素の混交の中から前近代的要素のみを抽出しなければならない。われわれは、以前、発展途上国の事例を取り上げるに際して注意した分析上の困難に再び直面する。

発展途上国の都市を取り上げる以上、その具体的事例に近代社会の影響が及ぶことは避けがたい。しかしながら、参照する事例の範囲を適度に制限することによって近代社会からの影響を最小限にとどめ、分析上の負担を多少とも軽減することはできる。植民地支配の深化と対外交渉の拡大がインド社会の近代化を促す要因であることを考慮すれば、この2つの要因の作用が比較的狭い範囲にとどまる歴史時期が分析上、好都合であることは明らかであろう。そこで、前近代社会における都市研究に限っては、取り上げる事例を19世紀以前に限定する。もちろん、インドの前近代社会は20世紀に入っても存続するから、このような限定は、単に分析上の負担を軽減するための便宜的手段でしかない。

北インドでは、少なからぬ都市が周辺領域に対する統治の中心として建設された。ムガル朝をはじめ北インドのイスラム諸王権は、新都市の建設を進めるとともに古くからの都市の再興を試みた¹⁰²⁾。都市は、イスラム王権の軍人・政府高官・知識人にとって、ヒンズー教徒の支配する都市後背地への進出拠点であった¹⁰³⁾。また、なかには、ラホールのように外敵に備えての前哨

基地として発展した都市もある¹⁰⁴⁾。一方、南インドでは、ヒンズー教の寺院を中核に都市が形成されることが少なくない¹⁰⁵⁾。しかしながら、どのような形成と発展の経緯をたどるにせよ、都市の経済的基盤はまちがいなく商工業活動に置かれた。18世紀後半、人口1万人以上の大都市は域内交易や遠隔地交易の場として機能していたし、定住的な市場は時として小都市へと成長を遂げた。加えて、人口3千人以上の都市では多数の手工業者の活躍を見ることができた¹⁰⁶⁾。実際、18世紀前半の北インドの諸都市の人口調査によれば、商人や仲買人が調査人口の30%を、織布工を中心とする手工業者が調査人口の20%をそれぞれ占めている¹⁰⁷⁾。南インドでも、手工業生産と交易は、都市の名に値するいかなる集落においても支配的な経済活動と見なされた¹⁰⁸⁾。もっとも、都市の経済的基盤が商工業活動にあるという事実は都市における農業生産の余地を排除するものではない。アグラやデリーのような大都市でも、皇帝や貴族は、野菜を栽培し、牛や家禽を飼育する農場を保有していた¹⁰⁹⁾、多くの地域で織布は農民の副業であり続けたからである¹¹⁰⁾。

都市では、織布・金属加工¹¹¹⁾・建築¹¹²⁾・製紙¹¹³⁾など幅広い工業生産が発展した。都市手工業の特徴は、村落の手工業生産と比べて高価で品質の高い財を生み出したことである。高価で品質の高い財は、海外市場を含む遠隔地交易の場で取引され、特に上流階層の消費需要を満たした¹¹⁴⁾。織物生産を例にとれば、少数の名の知られた産地で生み出される最高級品は王侯・貴族の消費に供されるとともに海外にも輸出された。また、各地の大都市も、最高級品とはいえないまでも比較的質の高い製品を地方軍人や上流階層、地方宮廷向けに供給した¹¹⁵⁾。金属加工の分野でもラホールをはじめいくつかの都市の製品は国内のみならず海外においても高い評価を得た¹¹⁶⁾。

多くの都市には手工業者の居住区域が設けられ、織物工など各職種ごとに街路が割り当てられた¹¹⁷⁾。都市においても農村と同様、手工業生産の基本的な単位は手工業者の家族であり、このような居住区域の一角にある手工業者の自宅は彼の典型的な仕事場となった¹¹⁸⁾。極度に単純で安価な道具を用い、それゆえ運転資本に対する固定資本の割合が非常に低い工業生産¹¹⁹⁾では、家族経営以上の経営組織を必要としない。その一方で、生産設備の貧弱さを補ったのは手工業者自身の高度な労働技能である。一部の質の高い奢侈品の

生産に関して言えば、生産工程はますます細分化され、各手工業者はますます狭い範囲の財の生産に特化していくなど労働技能の向上は著しく進んだ。同時代のヨーロッパ人を驚嘆させた織物から装身具、鉄製品に至る奢侈品の数々は、このような極度に発達した技能によって生み出された¹²⁰⁾。とはいえ、都市のすべての工業生産が独立の小経営によって進められたわけではない。イスラム王権の歴代皇帝に加え、デカンやマハーラーシュトラの諸政権は、高級衣料や兵器・家具・装身具を作るために千人規模の作業場を設立した。確かに、このような大規模生産は当時の技能水準の高さを誇るものである。にもかかわらず、官営の作業場が機械化された近代的工場に発展することはなかった¹²¹⁾。

都市は、穀物など都市住民の食糧供給を都市周辺の農村に依存していた¹²²⁾。その意味で後背地における生産物の余剰は都市の生存基盤であり、豊かな後背地の存在は都市の成立と発展の必要条件であるといえる¹²³⁾。実際、デリー・アグラ・ラホールの3大都市に隣接する地域はインド全域で最も耕作が進んだ地方であり、小麦・大麦などの穀物はもちろん綿花や砂糖きびに至る豊富な農産物を育んだ。また、この地域は鉄や銅などの鉱物資源にも恵まれた上、豊かな木材、強健な家畜の産地としても知られた¹²⁴⁾。交通手段が未発達な前近代社会では遠隔地交易はむしろ例外的であり、そのうえ、都市の一般の消費者は遠方から運ばれる高価な品々を買い求める金銭的余裕はなかったから、近代都市と比べ、都市の後背地への依存は一層大きかった¹²⁵⁾。

農村地域で収穫された農産物は、農民自身の手であるいは商人の存在を介して都市に運び込まれた。納税や地代支払いのため現金需要に迫られた農民は農産物を直接都市であるいは都市の商人に売り払い¹²⁶⁾、都市の商人やその代理人は農村部を回り、多くの小農家から穀物を買付けた¹²⁷⁾。その一方で、都市が周辺農村に提供した財は塩や鉄製品などを除けば数少ない¹²⁸⁾。村落には定期的な祭礼の際、遍歴商人によって中程度の品質の衣類や装身具がもたらされたが¹²⁹⁾、それが都市と周辺農村の間の恒常的な商取引である保証はなかった。インドでは都市はもっぱら後背地から食糧と工業原料を受け取るのみで都市から農村への工業製品の供給はほとんどなく、中世ヨーロッパやラテンアメリカで見られた都市と農村の間での域内交易は未成熟であった。

都市生活は周辺農村からの食糧供給によって支えられていたから、天候不順などによる農村での凶作は、その人口規模を左右するほどの深刻な打撃を都市に与えた¹³⁰⁾。都市支配層はそのため都市への食糧供給に常に多大な関心を払うようになる。北インドのイスラム王権は、都市内の治安維持と行政一般の責任者として都市長官 (kotwal) を任命した。都市長官の職務は主として法と秩序の維持、犯罪者の捕縛と処罰など司法警察業務であったが、商慣行の維持や度量衡の管理などの市場秩序維持もその職務に含まれた¹³¹⁾。都市長官をはじめ都市当局は特に、穀物の支配的な市場価格を公示し、一定の介入と強制を通じて穀物の円滑な流通に貢献した¹³²⁾。また、ムガル朝初期、アグラでは食糧全品目の需給を監視する体制が作られ、デリーでは市場で取引される全商品の値動きが皇帝に報告された¹³³⁾。

都市当局は、とりわけ食糧危機に際して穀物市場への介入を強める。飢饉が発生すると、都市当局は被災地域からの穀物の域外流出を禁じ、補助金を払って穀物の流入を促し、穀物業者による物資退蔵を非難した¹³⁴⁾。そもそもインドの伝統的な社会通念では、為政者は民衆に過大な税負担を強いるとしても、飢饉に際してはその埋め合わせに金銭や穀物の配給を行うべきものとされた¹³⁵⁾。

最後に、インドの都市を、これまで見てきた中世ヨーロッパやラテンアメリカの都市と比較してみよう。インドにおける前近代社会の都市は次のような際立った経済的特徴を持つことがわかる。第1に、都市の手工業生産の中で奢侈品の占める比重が高いこと。第2に、都市が、周辺農村の生み出した農作物や工業原料の一方的な受容者になっており、後背地に対する工業製品の供給源になっていないこと、言い換えれば、都市と農村の間に域内交易が十分確立していないことである。インドでは、農工間の分業がかなりの程度、村落内部にとどまり、農産物ばかりでなく工業製品に関しても農村は非常に高い自給自足性を保つ¹³⁶⁾。そのため、村落の外部で展開される手工業は都市富裕層や輸出向けの奢侈品の生産に偏り、周辺農村への工業製品の供給はごく低い水準に抑えられる。

3. 都市の経済的機能

各地域の歴史的事例を総合すれば、前近代社会において都市がどのような経済的機能を果たしてきたかがわかる。

都市生活の物質的基盤は手工業であり、経済的には都市は、まずもって手工業生産が集中する場である。もちろん、家族経営の手工業者が生産活動の傍ら製品の販売にも関わり、また、大商人の影響下、大規模に展開された手工業生産が遠隔地交易向けに製品を供給したように、手工業は商業活動から必ずしも分離されなかったし、また、都市の城壁内部に農地が残されることも稀ではなかったが、工業製品が都市における生産物の少なからぬ比重を占めていたことはまちがいない。

これらの工業製品は、農村の場合と同じく、都市でも簡単な道具と手の熟練から生み出された。熟練労働の担い手は、限られた範囲の工業製品の製作に専念する専門の手工業者である。専門の手工業者は、長い修業期間を経て高度な技能を身につけ、主に家族労働に支えられながら自宅脇の小さな工房で独立して生業に励むのが常だった。もっとも、原材料の供給や完成品の販売を顧客である領主や大商人に依存することも、場合によっては大商人や王室が直接経営する大規模な作業場に徴集されることも皆無ではなかったが、いずれの場合でも、熟練労働に基礎を置いているという都市工業生産の技術的性格は変わらなかった。

都市は主として手工業生産の場であり、都市内部の農業生産は、たとえそれがいくらか残存している場合でさえ、都市人口を養うには十分ではなかった。そこで都市住民は食糧供給を都市の外部に、特に都市近郊の農村部に依存する。近隣農村で生産された農作物は、都市住民の食糧としてあるいは都市手工業の原材料として都市に運ばれた。

農村から都市への農産物供給は、都市と農村の間で地域内分業がどの程度進んでいるかに応じて大きく性格を異にする。農工分業体制の維持に必要な工業製品の大部分が農村内部で生産されるとき、農工分業体制は村落の範囲内で完結する。都市手工業は、たとえどんなにめざましく発展していようと、農工分業体制の維持と直接結びつかない奢侈品の生産に限定される。も

ちろん、奢侈品を中心とする都市の工業生産も手工業者の食糧や工業原料を必要としており、その相当部分を周辺農村からの供給に頼っているが、それに比べ、都市から農村への工業製品の提供は皆無に近い。工業製品は村落内部で自給可能であり、農村は都市の工業製品を必要としない。都市と農村の間の地域内分業が未成熟にとどまるとき、農村から都市への農産物供給は、その反対方向への動きを伴わない一方的な財の移転になる。

地域内分業が進むと、都市も農工分業体制の維持に必要な工業製品を生産するようになる。一方、農村は徐々に都市手工業への依存を高めていく。都市への農産物供給は、同時に都市から農村への工業製品の供給を伴い、都市と農村の間に域内交易が始まる。農工分業体制は今や村落の枠内に収まらない。周辺農村の農産物と都市の工業製品の交換は農工分業体制の一環をなし、農工分業体制は都市と周辺農村を含む地域交易圏全域で成立する。

農工分業体制の一環である地域内交易は決して生産当事者間の自由な商取引ではない。第1に、農村で収穫された農産物の一部は、農村あるいは都市に居住する領主の手を介して都市に運び込まれる。第2に、現金収入の必要に迫られて、近隣農村に住む農民が都市内外の市場で農産物を売り渡す場合にしても、この市場取引は、市場開設の時間と場所の指定から始まって闇取引や買い占め、投機の禁止に至る様々な規制を領主・商人ギルド・都市当局から受ける。都市当局が、自らの行政手段を行使し、市場取引に介入したのは、なによりも都市住民の食糧の安定確保のためである。都市当局はそのため日常的に市場取引を監視し、市場秩序の維持に努めたばかりでなく、食糧危機に備えて食糧備蓄に取り組み、都市の食糧事情が極度に悪化すると、備蓄していた穀物を市場に放出した。

地域内交易に比べて、遠隔地交易に対する都市当局の規制ははるかに緩やかである。遠隔地交易を経て都市に流入する財の多くは農工分業体制の存続とは無関係な奢侈品であり、たとえその流入が途絶えても、農工分業体制に立脚する地域交易圏内の生産活動は深刻な打撃を受けない。そのため都市当局はあえて遠隔地交易に規制をかける積極的理由を持たない。遠隔地交易は、食糧危機の際、穀物の域外流出が禁止されるなどその影響が地域内交易に及ばぬよう規制を受けるだけである。

都市当局は、都市貴族や大商人から構成された。都市貴族の多くは近隣農村に領地を保有し、農牧業を中心に所領経営に努める一方、都市内には壮大な邸宅を構えるとともに商工業施設を整備し、領地で収穫された農産物を加工販売した。また、大商人は遠隔地交易を主な活躍の場としつつ、ときには遠隔地交易向けの大規模な手工業生産をも組織し、商工業活動から得た利得を近隣農村での土地取得に投じた。いずれにせよ、都市当局は、都市近郊での農地取得を通じて農村に一定の権力基盤を有する社会勢力の影響下に置かれた。

4. 結論

前近代社会において何らかの理由で手工業生産の集中が起こり、都市が形作られると、都市とその周囲の農村の間には恒常的な経済関係が築かれる。

農工分業体制の維持に必要な財を農村内部で自給できるとき、この経済関係は一方的である。農工分業体制は村落の境界内で完結し、都市手工業は奢侈品の生産にほぼ限られる。このとき、農村は、食糧や工業原料となる農産物を都市に向けてただ一方的に供給する。

それに対して、農工分業体制の維持に必要な財を農村内だけでは自給できないとき、この経済関係は双方向的になる。周辺農村の農民が収穫した農作物は、都市手工業者が製造した工業製品と交換される。農工分業体制は村落の境界を超えて、都市を含む地域交易圏全域に拡大する。

地域内交易は、地域交易圏を舞台に展開される農産物と工業製品の交換過程である。ただし、地域内交易は生産当事者間の自由な取引ではなく、都市当局の行政組織などを通じて領主層による仲介と監督を受ける。領主はここでも農産物と工業製品の交換の仲介者であり、領主制は農工分業体制を支える生産組織として機能する。農村に居住する農民、都市手工業者、都市当局を構成する領主層の間関係は、自給自足性の高い農村における農民、手工業者、領主の間関係と少しも変わらない。農工分業体制の成立する地理的範囲が村落内に限定されようが、地域交易圏全域に拡大しようが、いずれにしても、領主制は農工分業体制を支える生産組織として機能する。

注

- 1) 本稿は近代以前のすべての人間社会を研究対象としているわけではない。本稿が取り扱うのは、その中で領主制が成立する社会に限られる。
- 2) この点の詳細に関しては関根 [2000]。
- 3) Van Werveke [1963], p.14, Miller and Hatcher [1995], p.255.
- 4) Miller and Hatcher [1995], pp.262-263, p.255.
- 5) Pirenne [1969], p.145, Miller and Hatcher [1995], pp.258-259.
- 6) Pirenne [1969], p.46, p.50.
- 7) Le Goff [1980], p.198, p.236.
- 8) Pirenne [1969], p.37, Miller and Hatcher [1995], pp.265-267.
- 9) Le Goff [1980], pp.245-246.
- 10) Miller and Hatcher [1995], pp.325-327, Le Goff [1980], pp.247-248.
- 11) Harvey [1975], pp.21-22.
- 12) Le Goff [1980], p.248.
- 13) Miller and Hatcher [1995], p.256.
- 14) Miller and Hatcher [1995], p.26, pp.257-258, Le Goff [1980], pp.199-200.
- 15) Miller and Hatcher [1995], p.54, Van Werveke [1963], p.14.
- 16) Pirenne [1969], p.160, Harvey [1975], pp.20-21.
- 17) Pirenne [1969], pp.160-161.
- 18) Le Goff [1980], p.247.
- 19) Miller and Hatcher [1995], p.52, pp.81-82, p.85.
- 20) Miller and Hatcher [1995], pp.53-54.
- 21) Pirenne [1969], p.160, Miller and Hatcher [1995], p.83, p.85, p.54, p.371.
- 22) Miller and Hatcher [1995], pp.371-373, Le Goff [1980], p.289.
- 23) Thrupp [1963], pp.265-266, Pirenne [1969], p.162.
- 24) Le Goff [1980], p.293, Thrupp [1963], p.277, p.273.
- 25) Le Goff [1980], p.282, Epstein [1989], pp.15-16.
- 26) Pirenne [1969], pp.157-158, Miller and Hatcher [1995], p.362, p.369, Le Goff [1980], p.289.
- 27) Epstein [1989], p.17, Harvey [1975], p.36, Le Goff [1980], p.289.
- 28) Le Goff [1980], p.282, Epstein [1989], pp.15-16, Pirenne [1969], p.159.
- 29) Van Werveke [1963], p.23, Pirenne [1969], p.146.
- 30) Miller and Hatcher [1978], p.10, p.70, Van Werveke [1963], p.4, Pirenne [1969], p.149.
- 31) Miller and Hatcher [1978], p.210, p.242.
- 32) Miller and Hatcher [1978], pp.162-164, Despy [1968], pp.162-163.

- 33) Van Werveke [1963], p.14, Le Goff [1980], p.214.
- 34) Miller and Hatcher [1978], pp.75-76, Miller and Hatcher [1995], p.329.
- 35) Despy [1968], pp.164-165.
- 36) Kowalenski [1985], pp.143-146.
- 37) Kowalenski [1985], p.144, Miller and Hatcher [1995], pp.293-294, p.296.
- 38) Pirenne [1969], pp.149-151, Kowalenski [1985], p.146.
- 39) Pirenne [1969], pp.151-152.
- 40) Kowalenski [1985], p.146, Le Goff [1980], p.241.
- 41) Le Goff [1980], p.242, Pirenne [1969], p.45.
- 42) Miller and Hatcher [1995], p.321, p.302, Le Goff [1980], p.264.
- 43) Miller and Hatcher [1995], p.298, p.304.
- 44) Le Goff [1980], p.266, Miller and Hatcher [1995], pp.362-363.
- 45) Van Werveke [1963], pp.26-29, Miller and Hatcher [1995], p.301.
- 46) Miller and Hatcher [1995], pp.20-21, pp.270-271, Pirenne [1969], p.63.
- 47) Le Goff [1980], p.226, pp.333-334, p.200, p.225, Pirenne [1969], p.146.
- 48) Miller and Hatcher [1995], pp.27-30, pp.285-287, Le Goff [1980], pp.244-245.
- 49) Miller and Hatcher [1995], p.357, p.368, Le Goff [1980], p.263, p.266.
- 50) Pirenne [1969], p.157, Miller and Hatcher [1995], pp.362-363, pp.304-305.
- 51) Miller and Hatcher [1995], pp.318-319.
- 52) Miller and Hatcher [1995], pp.36-38, p.285, pp.288-289.
- 53) Miller and Hatcher [1995], pp.336-342, p.353.
- 54) Miller and Hatcher [1995], pp.351-354, Van Werveke [1963], p.21, Le Goff [1980], pp.343-344.
- 55) Le Goff [1980], pp.329-330, Miller and Hatcher [1995], pp.315-316, pp.342-344.
- 56) Le Goff [1980], pp.328-329, p.301, Miller and Hatcher [1995], pp.358-359, p.356.
- 57) Miller and Hatcher [1995], pp.355-356, Le Goff [1980], p.345.
- 58) Van Werveke [1959], pp.9-13.
- 59) 関根 [2000], pp.52-53.
- 60) Morse [1984], p.67, p.77.
- 61) Morse [1984], pp.102-103.
- 62) Scobie [1986], pp.234-235, p.247.
- 63) Morse [1984], pp.100-101, Scobie [1986], pp.259-260.
- 64) Scobie [1986], p.259.
- 65) Scobie [1986], pp.243-244, p.247.
- 66) De Ramón [1975], p.138, p.163, pp.154-161.
- 67) Toscano [1978], p.402, pp.414-415.

- 68) De Ramón [1975], p.146, pp.151-152.
- 69) Van Young [1981], pp.67-68, De Ramón [1975], pp.140-142, p.144.
- 70) De Ramón [1975], pp.147-148.
- 71) De Ramón [1975], p.147, pp.149-151.
- 72) De Ramón [1975], pp.148-149.
- 73) De Ramón [1975], pp.146-151.
- 74) De Ramón [1975], pp.146-148, Lockhart [1984], p.273.
- 75) Super [1976], pp.206-207.
- 76) Macleod [1984], p.233.
- 77) Super [1976], pp.197-199, pp.208-209.
- 78) De Ramón [1975], p.134, p.144.
- 79) Van Young [1981], p.56, De Solano [1978], p.105.
- 80) Van Young [1981], pp.12-13, p.24.
- 81) Van Young [1981], pp.45-46, pp.24-25, Garavaglia and Grosso [1989], p.567, p.570.
- 82) Van Young [1981], p.49, pp.63-64.
- 83) Barrett [1970], p.22.
- 84) De Ramón [1975], pp.164-166.
- 85) Van Young [1981], pp.26-27.
- 86) Super [1976], p.205, Toscano [1978], p.415.
- 87) Van Young [1981], p.52, pp.82-83, Florescano [1984], pp.172-173.
- 88) Van Young [1981], pp.82-86.
- 89) Van Young [1981], p.34, p.44.
- 90) Van Young [1981], p.44, p.54.
- 91) De Ramón [1975], pp.139-140, p.143.
- 92) Van Young [1981], pp.68-70, p.93.
- 93) Van Young [1981], pp.69-70.
- 94) Van Young [1981], pp.88-89, p.77.
- 95) De Solano [1978], p.115.
- 96) Van Young [1981], p.54.
- 97) Morales [1979], pp.497-504.
- 98) Van Young [1981], pp.94-95, pp.100-101.
- 99) Van Young [1981], p.88, pp.91-92.
- 100) Bayly [1983], p.347, pp.356-357.
- 101) Bayly [1983], pp.312-313.
- 102) Naqvi [1965], pp.211-212, Naqvi [1967], p.81.

- 103) Bayly [1983], pp.349-351.
- 104) Naqvi [1967], pp.216-217.
- 105) Stein [1982], p.455, Ramaswamy [1985], p.422.
- 106) Bayly [1983], pp.111-112.
- 107) Bayly [1983], p.113.
- 108) Chattopadhyaya [1986], p.28.
- 109) Naqvi [1965], p.241.
- 110) Ramaswamy [1985], p.419.
- 111) Fukazawa [1982], pp.310-311, Bayly [1983], p.144, p.357.
- 112) Habib [1982], p.81.
- 113) Fukazawa [1982], p.311.
- 114) Alaev [1982], pp.317-318, Mishra [1994], p.33.
- 115) Bayly [1983], p.144.
- 116) Mishra [1994], p.31.
- 117) Ramaswamy [1985], pp.422-423.
- 118) Raychaudhuri [1982], pp.278-279.
- 119) Raychaudhuri [1982], p.277, p.289.
- 120) Raychaudhuri [1982], p.278, p.294.
- 121) Habib [1982], pp.80-81, Fukazawa [1982], pp.314-315.
- 122) Habib [1982], p.83, Bayly [1983], p.153.
- 123) Chattopadhyaya [1986], pp.28-29.
- 124) Naqvi [1965], pp.230-232.
- 125) Naqvi [1965], pp.227-228.
- 126) Habib [1982], p.83, Bayly [1983], pp.445-446.
- 127) Bayly [1983], p.331.
- 128) Habib [1982], p.83, Bayly [1983], pp.346-347, p.446.
- 129) Bayly [1983], p.128, p.32.
- 130) Bayly [1983], p.305.
- 131) Hambly [1982], p.449, Bayly [1983], p.308.
- 132) Bayly [1983], p.332.
- 133) Naqvi [1965], pp.238-239.
- 134) Bayly [1983], p.330, p.333.
- 135) Bayly [1983], p.330.
- 136) Mishra [1994], p.30.

参考文献

一般

関根順一 [2000], 「不確実性下の農工分業体制：領主の存在理由」, 九州産業大学『エコノミクス』第5巻第2号, pp.41-69.

中世ヨーロッパ

Despy, G. [1968], 'Villes et Campagnes aux IX^e et X^e Siècles: L'exemple du Pays Mosan', *Ruvue du Nord*, Vol.50, pp.145-168. (平嶋照子, 森本芳樹訳, 森本芳樹編 [1987], 『西欧中世における都市と農村』, 九州大学出版会)

Epstein, S. [1985], 'Guilds and Métiers', in Strayer, J.R. [1985].

Harvey, J. [1975], *Mediaeval Craftsmen*, (London: B.T. Batsford).

Kowaleski, M. [1985], 'Markets, European', in Strayer, J.R. [1985].

Le Goff, J. [1980], 'L'apogée de la France Urbaine Médiévale, 1150-1330', in Le Goff, J., ed., *Histoire de la France Urbaine*, t.2, La Ville Médiévale, Des Carolingiens à la Renaissance, (Paris: Editions du Seuil).

Miller, E. and J. Hatcher [1978], *Medieval England: Rural Society and Economic Change, 1086-1348*, (London: Longman).

Miller, E. and J. Hatcher [1995], *Medieval England: Towns, Commerce and Crafts, 1086-1348*, (London: Longman).

森本芳樹 [1988], 「序：欧日学会状況の比較と本書成立の経緯」, 森本芳樹編著『西欧中世における都市＝農村関係の研究』, 九州大学出版会.

Pirenne, H. [1969], *Histoire Économique et Sociale du Moyen Age*, (Paris: Presses Universitaires de France).

Postan, M.M., E.E. Rich, and E. Miller [1963] (eds.), *The Cambridge Economic History of Europe*, Vol.3: *Economic Organization and Policies in the Middle Ages*, (Cambridge: Cambridge University Press).

Strayer, J.R. [1985] (ed.), *Dictionary of the Middle Ages*, (American Council of Learned Societies).

Thrupp, S.L. [1963], 'The Guilds', in Postan, M.M., E.E. Rich, and E. Miller [1963].

Van Werveke, H. [1959], 'La Famine de l'an 1316 en Frandre et dans les Régions Voisines', *Ruvue du Nord*, Vol.41, pp.5-14.

Van Werveke, H. [1963], 'The Rise of the Towns', in Postan, M.M., E.E. Rich, and E. Miller [1963].

ラテンアメリカ

Barrett, W. [1970], *Sugar Hacienda of the Marqueses del Valle*, (Minneapolis: University of Minnesota Press).

Bethell, L. [1984] (ed.), *The Cambridge History of Latin America*, Vol.2: *Colonial*

- Latin America*, (Cambridge: Cambridge University Press).
- De Ramón, A. [1975], 'Producción Artesanal y Servicios en Santiago de Chile (1650-1700)', *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, Vol.12, pp.134-166.
- De Solano, F. [1978], 'An Introduction to the Study of Provisioning in the Colonial City', in Schaedel, R.P., J.E. Hardoy and N.S. Kinzer [1978].
- Florescano, E. [1984], 'The Formation and Economic Structure of the Hacienda in New Spain', trans. by R. Boulind, in Bethell, L. [1984].
- Garavaglia, J.C., and J.C. Grosso [1989], 'Marchands, Hacendados et Paysans à Tepeaca: Un Marché Local Mexicain à la fin du XVIII^e Siècle', Trans. J.P. Zuniga. *Annales E.S.C.*, Vol.44, No.3, pp.553-580.
- Lockhart, J. [1984], 'Social Organization and Social Change in Colonial Spanish America', in Bethell, L. [1984].
- Macleod, M. J. [1984], 'Aspects of the Internal Economy of Colonial Spanish America: Labour; Taxation; Distribution and Exchange', in Bethell, L. [1984].
- Morales, M.A. [1979], 'El Cabildo y Regimiento de la Ciudad de México en el Siglo XVII: Un Ejemplo de Oligarquía Criolla', *Historia Mexicana*, Vol.28, No.4, pp.489-514.
- Morse, R.M. [1984], 'The Urban Development of Colonial Spanish America', in Bethell, L. [1984].
- Schaedel, R.P., J.E. Hardoy and N.S. Kinzer [1978] (eds.), *Urbanization in the Americas from its Beginnings to the Present*, (Paris: Mouton Publishers).
- Scobie, J.R. [1986], 'The Growth of Latin American Cities, 1870-1930', in Bethell, L., ed., *The Cambridge History of Latin America*, Vol.4: c.1870 to 1930. (Cambridge: Cambridge University Press).
- Super, J.C. [1976], 'Querétaro Obrajes: Industry and Society in Provincial Mexico, 1600-1810', *Hispanic American Historical Review*, Vol.56, No.2, pp.197-216.
- Toscano, A.M. [1978], 'Regional Economy and Urbanization: Three Examples of the Relationship between Cities and Regions in New Spain at the End of the Eighteenth Century', in Schaedel, R.P., J.E. Hardoy and N.S. Kinzer [1978].
- Van Young, E. [1981], *Hacienda and Market in Eighteenth-Century Mexico: The Rural Economy of the Guadalajara Region, 1675-1820*, (California: University of California Press).
- インド
- Alaev, L.B. [1982], 'Non-Agricultural Production: South India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].

- Bayly, C.A. [1983], *Rulers, Townsmen and Bazaars: North Indian Society in the Age of British Expansion, 1770-1870*, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Chattopadhyaya, B.D. [1986], 'Urban Centres in Early Medieval India: An Overview', in Bhattacharya, S. and R. Thapar, eds, *Situating Indian History*, (New Delhi: Oxford University Press).
- Fukazawa, H. [1982], 'Non-Agricultural Production: Maharashtra and the Deccan', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982], 'Northern India Under the Sultanate: Non-Agricultural Production and Urban Economy', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Hambly, G.R.G. [1982], 'Towns and Cities: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Mishra, G. [1994], *An Economic History of Modern India*, (Delhi: Pragati Publications).
- Naqvi, H.K. [1965], 'Capital Cities of the Mughul Empire, (1556-1803)', *Journal of the Pakistan Historical Society*, Vol.12, No.3, pp, 211-243.
- Naqvi, H.K. [1967], 'Progress of Urbanization in United Provinces, 1550-1800', *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, Vol.10, No.1, pp.81-101.
- Ramaswamy, V. [1985], 'Artisans in Vijayanagar Society', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.22, No.4, pp.417-444.
- Raychaudhuri, T. [1982], 'Non-Agricultural Production: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982] (eds.), *The Cambridge Economic History of India*, Vol.1: *c.1200-c.1750*, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Stein, B. [1982], 'Towns and Cities: The Far South', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].